

# 4. FIFA U-20 女子ワールドカップ チリ 2008

## 1) 大会全般

### ① 女子サッカーの世界大会とU-20ワールドカップ



女子サッカーの世界大会は、代表トップチームが参加するワールドカップ、オリンピックを頂点としている。現在、年齢制限を設けた世界大会としては、男子と同じく U-20(20 才以下)と U-17(17 才以下)のワールドカップが、FIFA によって 2 年ごとに開催されている。女子の育成年代の世界大会は、2002 年カナダで「U-19」として開催された大会 (FIFA U-19 Women's World Championship Canada 2002) から始まり、2004 年タイ大会と続き、2006 年ロシアから「U-20」の大会 (FIFA U-20 Women's World Championship Russia 2006) となった。そして本大会より、U-20 女子「ワールドカップ」(FIFA U-20 Women's World Cup Chile 2008) となった。

本大会には、各大陸予選を突破した 16 チームが参加し、2008 年 11 月 19 日から 12 月 7 日までの期間で合計 32 試合が行われた。大会では、16 チームが 4 つのグループに分かれて予選リーグを行い、各グループの上位 2 チームが決勝トーナメントに進出した。決勝ではチケットが完売し 12,000 名の観客でスタジアムが埋まるなど、チリでのサッカー文化の定着と女子サッカーへの関心の高まりが感じられた。前大会の覇者である DPR.K をアメリカが破って 3 大会ぶり 2 度目の優勝を果たした。

女子サッカーでは、ワールドカップとオリンピックが、年齢制限のない世界のトップレベルの大会として

開催される。FIFA U-20 女子ワールドカップは、その直下の世界大会であり、Christine SINCLAIR(カナダ)、MARTA(ブラジル)、馬(中国)選手など、この大会で活躍した選手たちが、その後各国トップチームの中核選手となる場合が多い。そのためこの大会は、育成年代の最終期となる選手たちが、世界を肌で感じ、自身の実力を推し量る貴重な機会であるとともに、将来の世界のトッププレーヤーへの登竜門として位置づけられる。

大会回数	第 4 回
開催国	チリ
開催期間	2008 年 11 月 19 日 ~ 12 月 7 日
参加チーム数 【アジアからの参加国】	16 チーム 【日本・DPR.K・中国】
大会成績	優勝：アメリカ 準優勝：DPR.K 第 3 位：ドイツ 第 4 位：フランス
日本の成績 【過去の最高成績】	ベスト 8 【2002 年カナダ ベスト 8】
日本の試合結果	◆グループリーグ 11 月 20 日 ○ 2-0 (2-0) カナダ 11 月 23 日 ○ 2-1 (1-0) ドイツ 11 月 27 日 ○ 3-1 (2-1) コンゴ ◆準々決勝 12 月 1 日 ● 1-2 (1-1) DPR.K
次回開催	2010 年ドイツ

### ② 女子サッカーの世界地図

本大会覇者のアメリカは北京オリンピック、3 位のドイツは昨年のワールドカップと、直近の世界大会でそれぞれ優勝しており、育成年代の取り組みがトップチームの強化に関して非常に重要であることが再確認された。

また準優勝の DPR.K は、前回の U-20 女子ワールドカップ、本年の U-17 女子ワールドカップを制しており、育成年代では世界のトップレベルであることを証明した。

そしてベスト 8 に進出したブラジルは、トップチームが世界大会で連続してファイナリストとなっており、育成年代からの強化が順調に進んでいること、日本・イングランドについては、近年トップチームが世界大会で着実に実績を上げつつあり、育成年代においても今後の動向が注目される。

### ③ 世界の中でのアジア

アジアの国々の戦いについて見てみると、日本の最大のライバルである DPR.K は前回大会に続いて決勝進出を果たし、育成年代では世界的女子サッカーの 1 つのスタンダードであることが示された。日本は、DPR.K に 1-2 と惜敗したものの、アジア予選時に比べて確実にその差が縮まっていることが確認できた。また 3 位となったドイツをグループステージで破るなど、世界の強豪国に近づく潜在的可能性を示した。中国はグループステージでの敗退となったが、優勝したアメリカに勝利するなど、日

本同様アジア予選からの成長がうかがわれた。

育成年代では、アジアのライバルである DPR.K を追い越すことが世界のトップレベルに直結すること、予選から本大会までの 1 年間にチームが大きく成長する可能性が大きいことが確認された。そして、アジアのサッカーのレベルが確実に世界に接近していること、そしてレベルアップの鍵が、「個のプレーの質の向上とチームの協働」にあることを深く印象付けられた。

## 2) 技術・戦術的分析

### ① 「個のタレント育成」と「チーム戦術の適応」(トップチームへの準備)

サッカーでは、「個のタレントに委ねる部分」と「チーム戦術を適応する部分」の2つのプレー要素が存在する。本大会では、育成期から強化期へと成長する年代の選手に対して、上記の2つの要素のバランスが各チームにより異なっていた。ここでは、本大会でベスト8に進出した主な国について見てみたい。

ドイツ・フランス・ブラジルは、「個のタレント」をベースにしながらか緩やかな「チーム戦術」を採用していた。それらチームの試合では、「個の育成」に軸足を置きつつも大人のサッカーへの移行を意識したオーソドックスなサッカーが進められていた。

一方、アメリカ・DPR.Kは、自陣でグループによる厳しいプレッ

シャーをかけてボールを奪い、リスクを負わないロングフィードからのビルドアップといった「チーム戦術」を徹底して、それぞれのトップチームに近い戦い方でゲームを進めていた。

日本は、守備面では前線からハイプレッシャーをかける「チーム戦術」を徹底し、攻撃面では緩やかな「チーム戦術(人とボールが動きながらのアクションサッカー)」のもとで、「個のタレント」が発揮されていた。この戦い方には、なでしこジャパンのコンセプトが多く取り入れられており、トップチームに近いサッカーを志向していたと考えられる。

### ② オリンピックやワールドカップ(トップチーム)との比較

北京オリンピックやFIFA女子ワールドカップ中国2007で見られたように、近年の女子サッカーでは、個の高い守備能力と組織的協働による「ハイプレッシャー下でのサッカー」が主流となっている。しかし本大会では、「ハイプレッシャー下でのサッカー」がそれほど見られなかった。その理由としてU-20の年代では、育成と強化の両者の要素が求められることが挙げられる。そのため、先述した通り、各国の育成・強化のスタンスに差異が存在し、守備のチーム戦術の徹底が十分に行われていなかったものと推察される。

このような状況の中、本大会の上位進出チームに共通して見られた要素として、「フィジカルアビリティの高さ」と「実戦的基本技術の高さ」が挙げられる。「フィジカルアビリティ」について、欧

米やアフリカの選手は先天的な身体的資質(体格・パワー・しなやかさ・スピード)を活用していた。これに対して、DPR.Kはトレーニングによって高いフィジカルアビリティを獲得しているものと推察され、アジアのフィジカル強化策のモデルとなる。次に、「実戦的基本技術」である「とめて、蹴る」といった実戦的技術の質が、非常に高いレベルにあった。そのため、やや単調なプレーが多い中でも、上位進出チームにはこの2つの要素を攻守の両局面で活用し、局面の打開を図ることのできる選手が数名存在した。

TSGでは、これら優れた「個のレベル」と「徹底したチーム戦術」に対応し、打ち破るために必要な要素について分析した。

### ③ 守備

#### -1 個の高い守備能力と組織的守備

本大会の上位進出チームでは、「個の高い守備能力」をベースにして緩やかな「組織的守備」が行われていた。言い換えれば、多くのチームで組織的守備は導入されているものの、「チームとしての協働」がチームとしてハイプレッシャーを実現するレベ

ルには高められていなかった。しかし、ペナルティエリア付近からは、簡単に決定的なプレーさせない「身体を張った激しい守備」が見られ、ゴール前の攻防については各国ともに非常に激しく厳しい守備が行われていた。

#### -2 チームの協働によるハイプレッシャー実現に向けて

世界との戦いの中で個のタレントで上回る相手に対しては、「ハイプレッシャーをかけてグループでボールを奪うこと」が求められる。守備におけるハイプレッシャーを実現するためには、「“ボールを奪いに行く”意識と行動力」が必要不可欠となる。特に相手の能力が高い場合に、相手との間合いを開けすぎる(スペースと時間を与える)と、守備が困難となる。そのため、まず相手を恐れず前線から「意図的に相手ボールのプレーコース(プレーの選択肢)に制限を加えるアプローチ」が必要となる。このプロセスで大切なことは、まずは守備の個人戦術と対人能力、そして勇気ある決断力を身につけることである。次に、意図的に制限を加えたプレーコースに対して、「ニュートラルポジション」(積極的な守備もカバーもできる、多様な対応が可能なポジシ

ョン)を取ること、すなわち守備のグループ戦術(チャレンジ&カバー)の徹底が必要となる。本大会では、日本が上記の守備戦術を採用し、個のタレントで上回る相手選手に対して大きな成果を上げていた。

トップチームとして世界で戦うためには、ハイプレッシャーと強固な守備の実現が必要であり、そのためにはボールを奪われたらすぐに奪い返す「個人の責任」とチームでの連動「組織の役割」の両者が必要不可欠な要素でとなっている。そのため、個人レベルの守備能力の向上には、育成年代の早い時期から取り組むことが重要となる。加えて、適切な年齢で守備のグループ戦術の定着がなされれば、チームとしての様々な守備の連動が円滑に行えるであろう。

### ③ 攻撃

#### -1 実戦的基本技術と状況判断能力

本大会の上位進出チームでは、高いレベルの実戦的基本技術を多くの選手が備えており、その中に「個の力で相手を突破する能力」を持つ選手が存在した。未だ研ぎ澄まされてはいないものの、広い視野と高いキックの精度、そして創造的なアイデアを発揮できる選手が見られた。DPR.K やアメリカなど、DF ラインからのロングフィードが中心のチームでは、リスクを減らしたロングフィードからそれら高いタレントを持つ選手が攻撃をリードしていた。一方、ドイツ・ブラジル・フランス・日本などは、DF ラインからビルドアップを行い、高いタレントを持つ選手が攻撃にアクセントをつけチャンスを作っていた。これらビルドアップを志向するためには、実戦的基本技術に加えて、周りを観て適切な状況判断をする能力がチーム全体に求められる。しかしこの年代の

チームでは、選手の中に状況判断のミスを繰り返す選手が散見され、試合を通じて攻撃のクオリティが維持されない原因となっていた。

またこの年代の強豪国では、ペナルティエリア付近での守備は非常に激しく厳しいものであった。その守備を突破するためには、相手のすきを見逃さない、あるいは強引にでも相手守備網をこじ開けて、ゴールへ向かう意識とそれを実現するスキルを持つ選手が重要となる。この点に関しては、各国にその潜在的可能性を垣間見せる選手はいたものの、彼女たちも未だ厳しいプレッシャー下ではコンスタントに能力を発揮できるレベルには達していなかった。

#### -2 攻撃におけるアクションサッカー実現に向けて

組織化された守備を突破するためには、人とボールが動きながら、グループでの組織的な攻撃が重要となる。しかし、ボールをチームで保持しているだけでは、ゴールの機会は訪れない。質の高い攻撃の実現には、高いレベルの「実戦的基本技術」と「状況判断能力」が必要不可欠である。ボールを動かしながら、「いつ、どのようにアクションを起こすのか」について、常に考え判断できる能力を伴わなくてはならない。やみくもにゴールへ向かうことだけを考えてはいけけない。しかし、ゴールを奪うためには、ゴールへ向かう勇気あるアクション(裏への飛び出しやドリブルでの仕掛け)も必要なのである。

今大会でも上位に進出したチームには、そのようなゴールへ

のアクションが個人レベルで行える選手が存在した。一方、日本では、ボールを保持しながらも消極的なプレーが多く、せっかく作り出したアクションの機会を見逃してしまう場面が多く見られた。また自分の意図を味方選手にしっかり伝えることができずに、貴重なチャンスをつぶしてしまう場面も見られた。

身体能力に優れ、チームで協働した相手守備陣を突破するためには、ボールを動かしながら突破のアクションを判断する能力と、そのプレーをしっかり伝え実現する技術が必要不可欠になる。メンタリティを含め、ゴールに向かい相手を突破する個人能力の育成は、育成年代で日本が長期的に取り組むべき大きな課題と考えられる。

[写真]

冊子版ではご覧いただけます。

## 3) 日本の戦い

### ① 大会に向けた強化

この大会に向けて、2007年2月にAFC U-19女子選手権大会の参加対象年齢である選手たちを多く招集し、「なでしこチャレンジプロジェクト」を行った。2007年10月に重慶でAFC U-19女子選手権大会が行われたが、そこまでの強化は国内合宿やオーストラリアとの戦いを想定したスウェーデン遠征などを行った。

佐々木監督は世界の強豪を破るために、日本のストロングポイントを発揮して、相手の良さを消し日本の良さを出すことに挑

戦した。スウェーデン遠征では同国代表選手を含むクラブチームに3連勝するなど手ごたえがあり、AFC U-19女子選手権大会ではDPR.Kに敗れたが、2位となりFIFA U-20女子ワールドカップの出場権を獲得した。

その後も定期的に国内合宿を行い、2008年8月はフランス遠征を行った。この遠征ではヨーロッパでもトップクラスのクラブチームのリヨンを破るなど4連勝し、U-20ワールドカップに臨む良い準備ができた。

### ② 日本の戦い

#### -1 グループリーグ: vs カナダ

サンチアゴのスタジアムは人工芝(短めでゴムチップの入ったタイプ)で、初夏のサンチアゴではピッチ上はかなりの暑さを感じた。強い日差しに加え、試合前に水を撒くので下からの熱でかなり暑かった。(最初のトレーニングではピッチ上の温度は34℃に達していた。)グループリーグ第1戦は、北中米予選でアメリカを破り1位となったカナダと対戦した。

体格・体力を生かしたサッカーをするカナダは欧米の強豪の典型であるが、その特長を消し日本の良さを生かす戦いが実践できた。積極的に前からプレスして相手のミス誘発させ、ボールを奪って速攻や落ち着いて攻撃を組み立てて、日本らしい戦いできた。2-0と快勝し良いスタートを切った。

#### -2 グループリーグ: vs ドイツ

ヨーロッパ1位でワールドカップに出場したドイツは、好選手を揃えていた。大きいばかりでなくテクニックもあり、それぞれ特長のある選手がバランス良く配置され、この年代では間違いなく世界のトップクラスと思われた。

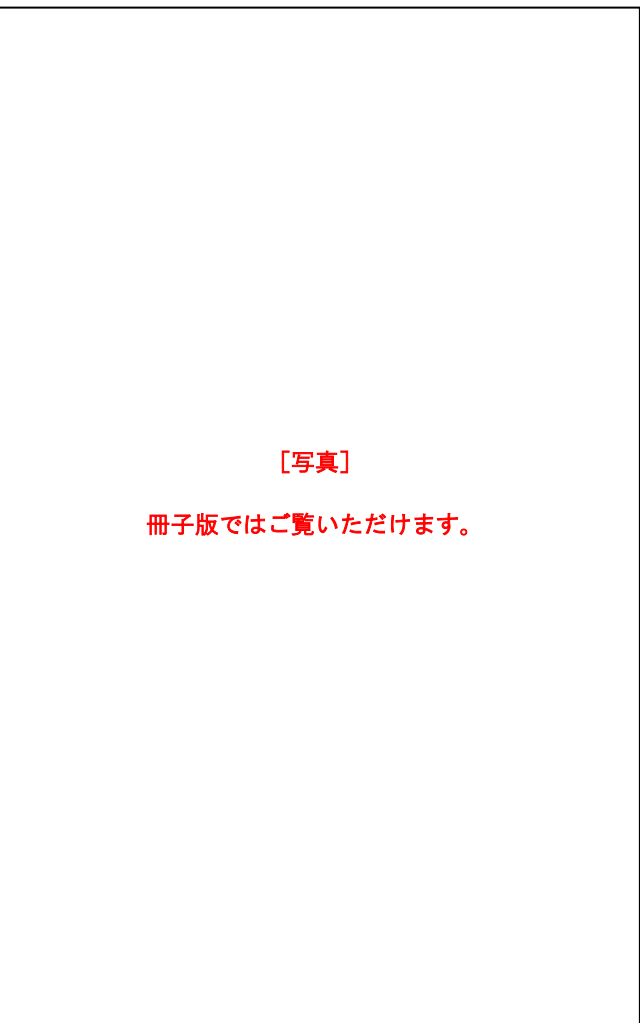
日本はカナダ戦とほぼ同じメンバー(GKだけ小林から菅原に)でスタートした。カナダ戦同様に前から積極的にプレスして相手を自由にさせなかったが、時おり決定的なピンチも招いていた。1対1の局面ではスピードとパワーの差で劣勢に回ることが多く、不用意なパスミスから速攻でピンチを迎えることがあった。

しかしボールを奪い、パスワークからDFラインを突破して小山が先取点し、同点にされた後も怯まず、小気味良い展開から永里が見事なシュートを決め、ドイツに快勝した。

#### -3 グループリーグ: vs コンゴ

グループリーグ2連勝で準々決勝進出を決め、第3戦のコンゴ戦はレギュラーを休ませサブにも経験させるためサブメンバー主体としたが、グループリーグ1位突破を狙って臨んだ。

世界大会の試合が初めてで緊張したり、相手選手の身体能力の高さに困惑したりで、思い通りの戦いはできなかった。コミュニケーション不足のパスミスやDFラインを観ずにタイミング悪くたび出すオフサイドなど、課題の多く残る試合であったが、3-1で勝った。



公式な国際試合出場が初めてという選手もいて、国際経験の大切さが我々も確認できた。しかしそんな中でも、初出場だがワクワクするという気持ちで試合に臨めた選手が、良いパフォーマンスを発揮でき、新たなタレントも確認できた。

結果的に狙い通りCグループ1位となり、準々決勝ではDグループ2位DPR.Kと対戦することになった。アジアで敗れたDPR.Kにどの程度戦えるか、興味深かった。

## -4 準々決勝：vs DPR. K

対戦相手がアジアで敗れた DPR.K となり、また目標のベスト4 実現のために良い準備ができ、高いモチベーションで試合に臨めたと思った。いざ戦ってみると前回の戦いよりも主導権は取れるものの、DPR.K の「肉を切らして骨を切る」的なシンプルで鋭い攻めや素早いアプローチで荒々しい守備に、日本の選手が怯むような様子がうかがえた。相手の 2 トップは長身でヘディングが強い選手と俊敏な賢いストライカーのコンビで、日本の DF は守りづらかった。日本が失点したのはいずれもスローインからの

速い攻めで、どちらも相手のドリブルに対して数的優位ながらも対応できなかった。DPR.K とは身長はほぼ同じくらいになったが、体力的な面(スピード・パワー・アジリティ)において差がある。この差を詰めれば、もっと優位な戦いができるだろう。

また、「この試合に勝てばベスト4 に進出できる、勝ちたい。」という気持ちと DPR.K への苦手意識がプレッシャーになったように思う。思い切ってチャレンジするという前向きな心理状態に持っていく必要がある。

## ③ 日本の成果

### -1 テクニック

この年代でもテクニックは世界のトップクラスにあり、U-17 年代と同じことが言える。ボールコントロール、パスなど正確に速くプレーすることができ、テンポ良くパスをつなぎシュートまでつなげる技術は世界でも通用する。

日本では 12 歳以下の少女が男子と一緒にプレーする傾向が年々高くなっており、男子とトレーニングすることもテクニックや判断力のレベルアップにつながっていると思われる。

### -2 世界の強豪といかに戦うか

このテーマについては、佐々木監督が一貫して日本のストロングポイントを生かし、臆せず相手を前からプレスして自由を奪い、攻撃に転じる戦いが功を奏している。北京オリンピックでも成果を出したが、去年からこのチームはヨーロッパで実践し、成果を

上げた実績がある。

ここで表現できた戦いを、個の質を上げ、チームの完成度を上げることで、世界のトップクラスを実現できると確信する。

### -3 ミーティングとテクニカル映像

試合分析、ミーティングによる理解、トレーニングによる改善、公式試合と、スタッフは粘り強く意欲的に行動した。テーマを絞ってミーティングを行い、日に数度行うこともあった。一度にミー

ティングで多くのテーマを与えるよりは、手間はかかるが回数をこなしたほうが良いと納得させる内容・結果だった。

### -4 メディカルサポートと自己管理

今回の事前合宿から大会まで、メディカルサポートと選手たちの自己管理の意識の高さで、ケガや病気で練習や試合のできない選手はいなかった。残念ながら DPR.K では GK の菅原が相

手選手との激突で膝を負傷したが、不可抗力のものだった。

ドクター・トレーナー・コーチングスタッフのコミュニケーションや連携が良く、選手のモチベーションも高く保たれた。

## ④ 日本の課題

### -1 スピード・パワー・リーチの差にどのように対抗するか

日本の良さを生かすチーム戦術が効果的で、かなりの部分で対抗できた。しかし、その上を行くには、個々の質を上げる必要がある。フィジカル面のレベルアップとともに重要なのが、「観ながら頭を働かせ・動きながらプレーする」習慣をつけることである。また、戦術的な理解もレベルアップしたい。18 歳からは C 級コーチコースを受講することができるので、選手たちに受けることを勧めたい。2008 年 2 月には女子の C 級コーチコースが初め

て開催され、なでしこジャパンの選手 7 名が受講し、北京オリンピックの活躍につながった部分もあると考えられる。

スピード・パワー・リーチの差(体格・体力の差)は世界と戦うときに、日本の永遠の課題である。日本は体力的に劣る分、賢く強い気持ちで戦うことが重要で、体格・体力の差を恐れず挑んでいくメンタリティとボールを奪い合う場面では身体を張る勇氣が必要である。

[写真]

冊子版ではご覧いただけます。

## -2 守備の基本

勝負が決まった失点場面は、守備の基本が習得できていないというケースが多かった。選手が守備の基本を理解していないのか、理解はしているが叱責の反応ができなかったのか、両方あると思われる。大会は終わったが、失点やピンチの場面を検証し、何が悪かったか正しく理解させる必要がある。そして理

解していてもできない叱責の反応ができるように、ゴール周辺の攻防のトレーニングを多くしたい。

これは育成年代から取り組む必要があり、小学生では少人数(8対8など)のゲームをメインにして、トレーニングでゴール前の攻防を多く・質を高く取り組みたい。

## -3 突破とフィニッシュ

攻撃のアイデアとフィニッシュは、U-17世代のほうが優れていたように思う。味方とタイミングを合わせて個性を発揮できるタレントが、U-17世代には多かった。タレントがいたからと結論づけるだけでなく、突破のテクニック・状況判断を磨かせる必要があ

り、映像とトレーニングを駆使して若い年代から改善していきたい。ストライカーはシュートばかりでなく、DFラインを突破する工夫やオフサイドにかからないようにラインを観ながらタイミングを計るなど習慣化したい。

## -4 フィジカル面の強化

もう少しスピードとアジリティがあれば、攻守に決定的な仕事ができるのにという局面が多い。少しでもレベルアップするために、下の年代から一貫した地道な強化を図っていききたい。なでしこ

ジャパンのフィジカルコーチが中心となり、フィジカル面の一貫的な強化の計画をたて実践したい。

# 4) まとめ

今回 FIFA U-20 女子ワールドカップでは日本らしい戦いができたが、目標のベスト4は実現できなかった。この年代からベスト4の常連となれば、なでしこジャパンも世界大会でのベスト4とメダル獲得が現実的になる。

今回もまた DPR.K が目標を達成する際に壁となった。DPR.K はどうしても勝ちたいという意欲としたたかさがあつた。それを跳ね除けて勝ちに結びつける総合力を我々は付けていかなくてはならない。個の質を上げ、日本らしい戦いのレベルをさらに上げて DPR.K を破れるようにしていきたい。それが世界のトップクラス

を達成することにつながると確信する。

世界の強豪(DPR.Kを含めて)とのスピード・パワー・リーチの差にどのように対抗するかということは、日本の女子サッカーが世界を相手にするときの永遠の課題である。U-20年代では良いサッカーばかりでなく、大人のサッカーの導入として、結果を出すことも要求される。このような厳しい相手を上回り、日本らしいサッカーでベスト4以上を目指したい。

### 育成年代の指導者へのメッセージ

なでしこジャパン・U-20 日本女子代表監督 佐々木則夫

選手一人一人の「ゴールを奪う」「ゴールを守る」という『サッカーの基本』の姿勢を大切に、『ゴール前の攻防』の質の向上をさらに意欲的に取り組んでいただきたい。

